
年刊『大蛇』 不定期連載 創刊号

大蛇真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年刊『大蛇』 不定期連載 創刊号

【Nコード】

N1072N

【作者名】

大蛇真琴

【あらすじ】

大蛇 真琴の短編小説集です。
未公開作品や、
新作もここで出して生きたいと
思いますので、
よろしく願います。

永遠の月影（前書き）

100P～200Pになったら、製本しようと思います。
是非、よんでみてください。

永遠の月影

永遠の月影

僕は、太陽に嫌われた子。そして、神に見捨てられた墮天使のよ
うな存在で、現実にはあり得ない、人間の中の人種。

…そう、吸血鬼だ。

そんな僕に手を伸ばす者もなく、寧ろ溺れさせて殺そうとしてい
る人間達がいる。

そこには、負の連鎖しかなく。ただの吸血鬼と言うことで、こん
なにも苦しめられる。

普通の人間が、血肉を貪る様に、僕は地を貪り吸う。

それが、僕の当たり前のことであり、人間では非常識なことだっ
た。

なら、問おう。『貴方達は、何も殺さずに生きて生き抜けますか
?』と。

僕はもちろんながら、それは出来ない。けど、僕は僕なりの生活
があるし、人間には人間の生活がある。

そう、それは『当たり前』から起こった、僕と人間との遠い昔話
なんだ。

夕暮れが近づいてくる。そこから、僕の生活が始まる。

白いブラウスを下着をつけずにつけ、パンツだけはいている。これが僕の寝巻き。

そして、鏡を見ると、瞳が大きく、頬がふくよかだが、体は華奢で、胸もちょうどいい大きさと言った、一見普通のように、普通の少女じゃないのが僕なのだ。

僕は吸血鬼だ。人間とは比べ物にならないほどの身体能力を持っている。その代わり、昼に出ると火傷をしてしまう。

医者に見せても不可解に見えるだろう。

…けど、一般の医者は僕を見ても、次会うときに殺される。

だから、意味がないし。この世界じゃ当たり前なもの。

僕の名前は、ムエン。不可思議な名前だが、僕の名前を聞いて、まず、関わるなって意味を持つてる。

そう、人間関係とは無縁なのだ。それを、今であれ、過去であれ、未来であれ、無縁なのだ。

僕の屋敷は、富士の樹海の中にひっそりと佇んでいる。

たまに、僕のうちに遊びに来る人がある。その人たちの血を僕が飲むわけだから、保存すれば、外に出なくて済む。

僕の屋敷では、お仕事を持ってくる人もいる。

僕の僕だ。名をユータという。黒い髪の七三分けでメガネと言うしよばい男だけど、医師の経験と、死体処理がこの男の手にかかれば、あつという間で楽なのだ。

「僕、出かけてくるよ」

ユータは、靴とサングラスを用意した。

「何時にお帰りで？」

「定刻3時」

ユータは『かしこまりました』と、会釈すると、僕を羨ましそうないつもの目で見送った。

僕は、ふと感じる。

「この男、もう駄目だろうな」と。

僕は、黒い大型二輪車に乗り、富士の樹海にある道路を越えて、下町に出る。

これが、僕の日課だ。そして、短い夜の長い一日が、こうして始まる。

僕は、何となく富士のPAパーキングエリアに来ていた。

いつも通りの喧騒。そして、僕が獲物を狙うのも、大体はここだ。
巷のうわさだと、TVと言う物によく取りざたされていたP Aらしい。

ふと、金髪で長髪、そして無精ひげを生やした、一人のライダーを見かける。

僕の吸血意欲が奥の底からこみ上げてくる。
…決まりだ。

僕は何気なく声をかける。

「やあ、やっぱ走りは最高？」

見た目が少女の僕に、戸惑いを隠せない様子だ。

「んー、半分半分だね」

少し考えていった言葉は、すごく曖昧な答えだった。

「何が、半々ななの？」

少年らしきライダーは、タバコを加えながら、僕を惑わせることを言った。

「風も確かに最高だけど、自分が今生きてるのに実感できないこともあるから、その悩みと最高で半々」

僕は、少年の曇りない答えに余計に関心を抱いた。そして、それは一目ぼれに似た感情だったかもしれない。

「女性って好き？」

少年は驚いた、そしてあつけない言葉が返ってきた。

「興味はあるけど、正直どうでもいい」

僕は感心する。僕の周りには、人間も吸血鬼も一緒だと意義を言う者も、明らかに違うと言うエゴイストもいたが、この少年の答え

は、YESでもNOでもなく、中途半端なのだ。

普通の人間からすれば、興味をそぐわれるかもしれない。けど、僕はこの少年に思いを募らせる形となった。

「僕が普通の人間じゃなかったら、どうする？」

食する前に言ってる言葉だ。せめて、こういう言葉ぐらいはかけてあげないと、残酷すぎる。

「うーん、それは、面白そうだね」

少年の一言に、僕は彼をホテルへと連れて行った。

濃厚なキス、大人ではないながらも、それをするためにあるような体で、二人は貪りあった。

そして、そんな太陽の子と触れ合って、僕は、屋敷へと戻ったのだ。

「ユータ、いるんでしょう？話があるの」

僕は僕を呼ぶのだが、今日は返事がない。

けど、昨夜のことを僕は忘れられないでいた。何せ、初めての夜だったからだ。

「ユータ？」

どうやら、食事を用意しておいたようだ。

「朝は、昨夜の方の血のスープにございます」

僕は一瞬思考が止まった。

「何だって！ユータ、あなた死にたいの？」

僕はうなずく。そして、不気味な笑みを浮かべる。

僕は、ユータをバラバラに解体した。

そして、僕に残ったのはまた絶望感と孤独になった。

喉元にナイフを当て、刺した。僕の流血は、吸血鬼に相応しくな
いきれいな物だった。

永遠の月影（後書き）

創刊号のアクセス数で製本化を決めたいとおもいます。

ハック オブ BAD OR GOOD? (前書き)

元ハッカーの、悲しき人生。

ハック オブ BAD OR GOOD?

HACK & BACK

著 大蛇 真琴

…よくある話だ。現代風の時代背景にも古風な時代背景にも、「盗み」と言う手法は存在している。

今ではPC（パーソナルコンピュータの略）を使って、相手のネット口座から金を引き出すことも可能だ。

…そう、俺はハッカーだ。ネット上では関東一有名だ。

何故なら…今、俺は大企業の決算報告書を改ざんしている。俺のプログラムで作ったハッキングシステムに改ざんのソフト。

それを使えば、改ざんなど6時間程度で終わる。

しかし、現実では甘くない…。何故かと言えば…。

「仁、ご飯よー」

…こうだからだ。

「今、いくよー」

俺は両足が動かない…深く言えば事故でこうなった。

プログラミング会社で働いてた俺は、今や収入が五分の一になり、生活するのもやっとだからだ。

やれる事と言ったら、パソコンの修理、プログラム開発…。

しかし、そんなに稼げる物でもなく、母親の体たらくな生活力に仕方なく、やったのだ。…最初のうちは。

しかし、今や普通の暮らしが出来ないほど隠し資金が多い。

他人名義の通帳や、携帯電話。そういうものを使うのも今や古い。今の時代ネットでも出来るのだ。良くあるのが、残留された通帳のデータ。これもハッキングで容易に手に入る。

そして、携帯。PCで複製UMDチップが作れる。よもや、ハッキングバブルなのだ。

そんな中、特に注目するのが、ネット口座。他人の住所なども区

役所のPCに時間外（昼飯時）にデータを頂く。ハッキングの基礎とウィルスの構築基礎があれば、容易にどこでも、侵入し、データを盗めるのだ。「しかし、この足じゃな…」

肝心の二本足がない。これでは、そんなに稼げないと思いきや…。稼ぐ方法がある。隣宅がネットを繋いでいれば、直に電波が拾える装置を俺は作った。所謂、盗聴器成らぬ、盗伝器なのだ。

しかし、問題なのは処理の仕方だ。

でも、結構容易である。

パーツをばらして、記憶デバイスだけ、焼いてしまつか、もしくは強酸性の水槽を作り、沈めてしまえばいい。

俺は、そうやって稼いで来た。

「しかし、あれだな…」

そう、最近ネット犯罪の網の目が大きく報道されてきている。

「俺も、豚箱か？まさかな…」

俺は、通販しか使わないが、ラジオ街では、知識のない友人に1セット以上の代物を買わせて来る。

そういう事で網の目を潜り抜けてきたわけだ。

しかし…、そう、俺ももうそんなには出来ないだろう。

明日、記憶デバイスをその作業で消去した後、俺は新しいPCを手に入れた。もちろんゲーム用にだ。

インチキなしでやる。これが本来の俺なのだ。

仕事も、PCを組み立てる仕事を引き受けており、評判は上場だ。俺はニートのハッカーから、SOHOへと変貌を遂げたのだった。ゲームをやっているうちに、画面が動かなくなる。

「まさか…」

そう、ウィルスだった。しかも、ニュースによると、新型らしい。「ん、待てよ？」

この方法はどこかで覚えがある。

いや、俺がやっていた手法に似ていた。

俺は、すぐさまネットを防ぎ、以前俺が開発していたウィルスバスターを起動させる。

6時間後、デリートに成功したようだった。

幸い、このPCにはハッキングしていた痕跡はなく、セーフだと確信していた。

この行為で数々のハッカーが捕まったようだ。アンチウィルスだったらしい。

何故なら、ハッカーはウィルスに対して、関心と知識を高めてからやるものだ。

しかし、俺も日本にいることはもう出来なくなるだろう。

そう思い、過ぎ去りし時を過ごし、俺は人生を終えるのであった。

END

ハック オブ BAD OR GOOD? (後書き)

ハッキング行為は犯罪です。

周りの目に晒される重大な事件になります。

ダメ、絶対！

名無しと言つ名の闇（前書き）

名無しの少女が思う頃の原点の作品であります。

それ故に、この世界観はフィクションと分かる物ですが、現実直面している、多重人格者及び普通の人でさえ、人権を安易に侵害される世の中です。

私の世界観は独特ですが、それが良い発想力や表現力。そして、皆さんの発言力を震えさせられたら、嬉しいです。

名無しと言う名の闇

牢屋と月明かりと僕

著 大蛇 真琴

僕は二年前、罪を犯した。十六の時だ。

罪名は殺人。今は判決を待っている。一審では、僕は精神鑑定の結果、無罪だった。

当然の如く、検察は控訴。

そう、僕は擬似的な二重人格を持っている。

擬似的なと言う方が正しいだろう。記憶は共有している。だが、あつちの記憶はない。いや、眠ると同時に消しているのだろう。そして、嫌な日に嫌な時間に嫌な記憶を思い出させるのだ。

そして、今日も僕は牢屋の中で、月明かりの中、嫌な思い出を思い出させる。

「止めろ！僕を壊さないでくれ！」

悲痛な叫びはあちら側には、面白いようだ。より、強い衝撃を与えてくる。

壁に何度も頭を叩きつけ、自我を留めようとする。だが、柔らかな素材に変えられた壁には効果は無い。

刑務官は、もう慣れてしまったのだろう。俺に一蹴もせずに、別の部屋への見回りと向かう。

僕の額や唇には涙で溢れていた。

僕はあの悔やむに悔やみきれない事を思い出していた。

僕が殺してしまったのは、実の妹だった。

妹の首を足で押しつぶしたのだ。最初は息苦しかっただろう。でも、とめる事は出来なかった。なぜなら、あいつが生まれてから、僕には主導権と言うものが無かったからだった。

「お兄ちゃん」

妹の鈴が、花を持ってきてくれた。可愛らしいタンポポだ。

黄色のそれは、とても穏やかで華やかではないけれど、優しい色だった。

「お兄ちゃんみたいだね」

僕は頷く。けど、確証が持てないそれは現実になったのだ。

突然、耳が痛くなり、声が雑音のように嫌な音を響かせ、僕を襲ってきた。

街中で何度もそれが起きるようになってからある日の事。猫の死体を見た自分の顔を鏡で見て驚いた。…笑っていたのだ、不気味な程に。

それ以来、耳鳴りは収まった。が、他人と接する事をやめる様になったのだ。

それは、僕が正義と言うものを見失ったからだろう。

だから、僕は人と触れる事でその人を壊してしまうかもしれない。そう、予見していたのだ。

それでも、妹は僕を宥めて来てくれた。励ましに来てくれた。

…なのに僕は…、何故妹を殺してしまったんだ？

何故、とめる事が出来なかったんだ！

裁判中、僕はそれを主張した。けど、それを不快に思う人がいた。

…実の両親だ。

そのことから、僕の弁護士もあまり来なくなった。

それから、二審に入ろうとしている僕に、一人の弁護士が訪れた。

…意外にも若い女性だった。

名前は清水 愛さん。駆け出しの新人弁護士のようだが、僕を更生へと向かわせる事を色々としてくれている。

昨日もそうだった。

「愛さん、何故そこまで僕を励ましてくれるんですか？」

愛さんは自信気に言う。

「決まってるじゃない！了君を婚約者候補にするためよ！」

僕は少し黙って説教をすることにした。

「愛さん。百二十%分かる励ましの嘘を言わないでください」

愛さんは、テへと笑う。

「でも、了くんは、いい顔筋してるよ。私、彼氏いないからゲットしたい位だもん」

僕はため息をつく。

「何で、僕みたいな人を彼氏にするんですか…？大体、愛さんにも彼氏の一人二人…」

言い終わろうとした時、愛さんは強く言うのである。

「本気だよ！」

僕は驚いた。目が本当に本気だったからだ。

「えっ？」

「だって、君みたいな真っ直ぐな眼をして、悲しそうな顔をする子ほっとけないし…、私のタイプだから」

それからである。何か僕に力がわいてきた。暴力の力じゃなく、自分の意思を保とうとする力が。

僕はどうするべきか…考えた。そして、明日…。

「愛さん、本を持ってきてもらえませんか？」

彼女はすぐに答えた。

「いいよ？何々…もしかして、えっちい本？」

僕は真顔で答える。

「違います。…ちよつと欲しいけど…。そうじゃなくて！僕は被害者になったことが無いから、被害者の心境が分かりません。…だから、被害者から見た加害者への思いというのを知っておきたいんです！」

彼女はすごく驚いてた。そして、満面の笑みで答えたのだ。

「いいよ。…さすが、私の王子様だね」

僕は冗談にして、聞き流しておいた。彼女はそれを気にしたか、一言加える。

「えっちい本も持ってくるから」

「ダメですよ、十八歳未満だし…。それにそういうものは禁じられてるんですよ？」

愛さんは舌を鳴らす。残念そうだ。

「まあ…いいわ。んじゃ、もって来るね」

それから言うもの、僕は自由な時間を見つけては、本を読むことにしている。

「これから、神崎 了被告の二審を始めます。被告人は礼を」

僕は一礼をする。その中、被害者であり、実の両親でもある家族は、僕を一瞥した目で見る。

その場で僕は泣きそうになった。

「では、検察側。原告を述べてください」

低い声が裁判所に響く。

「神崎 了は、実の妹を殺したとして…」

一審では精神的な問題があるがゆえに、無罪となりましたが、新たな証拠があるとして、その証拠を元に、被告に死刑を求刑する次第であります」

…死刑。その言葉に、観覧席がどよめく。

記者は急いで、外に出ている。恐らく、報道で速報するつもりなのだろう。

僕も意外だった。一審で求刑された時より重い。

しかし、僕を殺したい気持ちは分かる。僕の父は国会議員で、母は秘書。政界の派閥のドンだからだ。

愛さんは、勢いよく手を上げた。反論を言うのだろう。

「検察に問います。何故、今になって求刑を重くしたのでしょうか

？被告はまだ未成年であり、更生の余地は十分にあると思いますか？」

検察は静かに低い声で言う。

「被告は、精密検査の結果、以前癌だと言う申告が医師からありました。ですから、癌の末期患者は、結果的に一緒と考え、死刑と言う求刑をしたという経緯にあたる次第であります」

…ん？ちよつと待て、精密検査？僕はそんなことした覚えないぞ？

僕は目で愛さんにサインを送る。

「ですが…、その証拠はどこにあるのでしょうか？被告はその覚えが無いといっておりますが？」

検察は無言の会話に驚いたようだ。

「…あります。その証拠はこれです」

裁判中に提出されたそれは、三年前の十月、カルテには肝臓癌と書かれていた。

「反論はございますか？」

難しい事はサインを送れず、僕が手を上げる羽目になった。

「裁判長。その日は、僕は中学の部活をしていました」

裁判長は疑問を検察側に問いかける。

「と言っております、検察側。それは正しい証拠なのですか？」

検察側は予想外の人物を証人として出してきた。それは、二人だった。

一人目は母だった。

「了は朝早くから具合が悪く、その日は欠席して病院に連れて行きました。学校の担任からも確認は取れておりますので、間違いはありません」

以上だった。そんなことがあるはずはない。三年前はまだ正常だった。だから記憶も僕の管理下にある。だから、その日は確かなものだった。

「そんなはずは無い…！僕はその日は学校に」

裁判官の声が響く。

「静粛に。では、二人目の証人、前へ」

二人目の証人。それは、1審中の弁護士だった。

「被告人は凄く精神病で衰弱していると言いましたが、あれは本人からの出まかせでした」

僕は、驚く。あれほど僕を弁護した人間がこうも簡単に裏切ったのだ。確かに精神鑑定を受けた。で、結果はうつによる神経的疲労と、強迫観念からでる心の衝動から、と言うものだったはずだ。

要するに、妹が僕のことを殺そうとして、死にたくないという強迫観念から妹を殺した。そういう結果だ。

「被告人は、精神疾患があるように見せ、審議の詐取を行なおうとしました。ですが、私は遺憾にその行動を知りつつも、本人の意向で行い、1審で間違った判決を下された事を誠に反省しております」
愛さんは、手を上げる。

「石田弁護士に問います。貴方は現職を辞する意向で言いましたね？」

石田弁護士は頷く。

「そのつもりです。その事について、何か？」

力ある答えだった。何かがおかしいと気づいたのは、愛さんもわかったようだ。

「愛さん、どうでしょうか？」

愛さんは苦笑する。

「そうね…、そう来るなら…。でも、私だけじゃ無理かな…」

私だけじゃ無理と言うのはどういう事だろうか。何か心のうちを秘めているようだか…。

「わかった、先輩達に相談してみるわ」

「誰の事ですか？」

愛さんは真剣な顔でいう。

「…昔。って言っても、五年ぐらい前なんだけど、ジャッカルっていうゲリラ報道の集団組織があったんだけどね。それが、国の

腐敗さを報道してから、組織の集団を暗殺するようになったのよ」
ジャッカル、聞いた事がある。

兵士でありながら、戦場で数々の国の腐敗さを撮影し、全世界から追われることになったと言われる、軍政革命の兵士達の部隊、総称ジャッカル。

死を司る神官、名をジャッカルと言った、エジプトの伝説に残る、ミイラの作り手達である。

それをモチーフにしたのは、訳があつた。第二次世界大戦から、行なわれてきた、アメリカの核実験などを公表し、世界を震撼させたのも、この部隊の情報漏えいからという報道が流れているからであつた。

「私は、その部隊の候補生だつた。けど、辞めた。それは、部隊長からの言葉だつたわ。『自分を改め、そして見つめなおす事に人生を使いなさい。そして、君は人を殺せるような人間にはなつてはいけない。』ってね」

愛さんは涙を流す。

「それからだつた。私が居なくなつてから、彼らは死んでつた。そして、ジャッカルの元団員は四人しか居なくなつてしまつた」

僕は、何を語ればいいのだろう？僕は、犯罪者だ。だから、何も声を掛けられない。けど、一つだけいえることがある。

「大丈夫、僕は死んでも愛さんの心の中で生きるから。ジャッカルの皆もそうだよ」

愛さんは、ハツとする。その言葉の意味が分かつたのだろう。悟れたのだろう。

愛さんは涙を拭き、現実に戻つてきた。

「叙情酌量人、前へ」

現れたのは、ごく普通のスーツ姿の男だった。ただ、眼光は鋭く、裁判官さえも意気を飲む人物だった。

「裁判官、この男が本当に酌量人なんですか!？」

検察は怯えているようだった。

「よお、また厄介になるぜ？」

少し間を置き、裁判官は男に名前を問う。

「秋雨 勇次。私立探偵をやっている」

「本件とはどういう経緯で来たのですか？」

裁判官は、重い口調で言う。

「まあ、マスコミには事前配りの、資料を持ってきたんだがね。事件のね」

そうだ、今日は観客席にいる人がやけにメモを取っている。

「そして、この裁判の内容は盗聴されてる」

記者たちはざわめく。一斉に出ようとするが、扉は開かない。

「この部屋に通じる扉はすべて開かなくした。しかも、この音声は、全世界に放送中だ。しかも、変換コンピューターのおかげで、全世界八十%の人間が聞いている、一大イベントさ」

裁判官は驚く。勿論、僕も驚いた。例の人たちがここまですごい事をするとは思わなかった。

「まず、第一に。ここにいる裁判官、マスメディアの一部、そして、検察と一審の被告人。こいつらは、加害者であり、被害者の父親でもある神崎 直人氏による裏金の口座残高報告書。これは、ネットで見れるようにしてあるし、中国、アメリカ、ロシアなどのメディアにも、翻訳して送ってある」

男はさらに追及の手口を止めない。

だが、あることが疑問によぎっていた。

…父親？母親は？

「第二に、自称実の母親である神崎 輝代氏は、十八歳の時に、子宮ガンで子宮を切除しており、事実子供が産めなかった。つまり、愛人との子供を実の子として申請している。これは、直人氏の父、修氏による裏金で成立していた、虚偽妊娠なのである」

これには思わず、愛さんも驚いたようだ。

「そして、少年には一審の医師の判断にセカンドオピニオンにより、診断は確定的になった。以上だ」

そういうと、男は足早に天井口から逃げていった。

「裁判長、これらの証言は正しく判断されるべきではないでしょうか？」

裁判長は、しかめっ面をしていた。何しろ、自分たちの不正が明らかになったからだ。

「裁判長！」

激しく怒鳴ったのは僕のほうだ。

「愛さん、僕はもういいんです。全てを知った上で僕は死ねるんです。それ以外に幸福はあり得ません」

僕は力を込めていった。

「僕を死刑にしてください」

…そうして、僕は死を迎えた。

…けれど。

そう、俺は生きていた。ここは病院だ

しかし、肌の色が違う。病院にいた割りには、肌が黒い。

そう、俺は黒人として再び生を受けた。

…いや、俺が宿主を殺した上で、新たな肉体の宿主をも殺したのだ。

そして、4月、俺は日本へと舞い戻り、あの男の目の前でこういつた。

「気をつけろ、俺らはどうやら何かの予兆に用意された代物らしい。どうやら…これから、お前らは過酷な運命を背負うことになるだろう」

…と。

そして、俺も次のステージまで消息を絶っていた。
了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1072n/>

年刊『大蛇』 不定期連載 創刊号

2010年10月8日14時43分発行